

学校教育における体罰に関する一考察

A study of punishment in the school education

1K06B092

指導教員 主査 友添秀則先生

幸田 真澄

副査 宮内孝知先生

【本研究の動機・目的】

近年、学校教育において生徒指導と銘打った、教師による生徒・児童に対する「体罰」が問題となり、生徒・児童が怪我をする事件や、最悪の場合、死亡するという事件も起こっている。事件として公にならない軽微な「暴力」をも考えるとその数は計り知れないだろう。教育において本当に必要とされているのは身体的な関わりではなく、精神的な信頼関係であるべきなのに、体育授業や運動部活動においては、生徒・児童を指導する際に叩く、蹴るなどの行為が頻繁に見られ、これらの行為は「体罰」ではなく、教育的指導の一部であってなんの問題もないとされてしまっている。筆者自身も、中学校、高校時に生活指導を受ける際には大抵の場合、言葉による指導ではなく「暴力」による指導をされてきた。ほとんどの生徒は教師による「暴力」が違法であるという認識がないため、問題化されずに黙認されているのが現状なのである。そのことが、体罰による死亡事故などが繰り返される大きな要因になっているのではないだろうか。そこで、学校教育における体罰の社会的意味を明らかにしたいと思い、本研究のテーマにした。

【本研究の方法】

主に体罰、懲戒、体罰事件の判例などの文献を用いて研究し、必要に応じてインターネットの情報も活用する。

【各章の概要】

第一章 体罰の概念及び特徴に関する検討

第一章では、1948年に法務庁によって示された、「児童懲戒権の限界について」による体罰の基準に沿って体罰を定義し、体罰としばしば混同されがちな懲戒と比較検討をした。そして、そこから考えられる体罰の特徴について検討し、体罰の非教育的側面を明らかにした。章の最後の節として体罰禁止法制の制定から今日までの流れを追うことで、第二章の第一節へとつなげることにした。

第二章 体罰問題の背後にある問題

第二章では、日本において、1879年という早い時期から体罰禁止法制が明文化されていたにもかかわらず、体罰が根絶されないのは、体罰を支えているいくつかの存在があるからだとした。そこで、体罰禁止法制そのものの欠点、古くからいわれている「愛の鞭」論の問題、家庭・親と学校・教師の関係の問題、学校・教師の問題について検討した。

第三章 学校で起きた体罰事件の事例

第三章では、学校で実際に起きた三つの体罰事件(水戸市立第五中学校事件、岐陽高校事件、中津商業高校事件)の判例をみることで、それぞれの事件の概要から考えられる体罰の問題について検討した。

結章

結章ではこれまでに述べてきた体罰の法的定義や特徴、体罰が根絶されない原因など、本研究内容をまとめた上で、今後の課題を検討した。そこで体罰根絶に最も必要なことは、教師、子

ども、親など教育に関わるすべての人々が、教師の体罰はどんな理由があるにしろ違法であり、絶対に行ってはならない非教育的な行為であるという認識を持つことである、というようにまとめた。